

Handicrafts Education and Works in Hakodate Otsuma Handicraft School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): Hakodate Otsuma Gigei School, Education of Handicrafts, Art Embroidery, Hatsu Toyama, Kotaka Otsuma 作成者: 中川, 麻子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6341

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



函館大妻技芸学校の手芸教育

中川麻子
大妻女子大学家政学部被服学科

Handicrafts Education and Works in Hakodate Otsuma Handicraft School

Asako Nakagawa

Key Words: 函館大妻技芸学校 (Hakodate Otsuma Gigei School), 手芸教育 (Education of Handicrafts), 美術刺繍 (Art Embroidery), 外山ハツ (Hatsu Toyama), 大妻コタカ (Kotaka Otsuma)

要旨

大妻技芸学校卒業生の外山ハツが創立した、函館大妻技芸学校（現函館大妻高等学校）所蔵の手芸作品について調査を行った。

30 点の手芸作品の現物調査から、函館大妻所蔵の手芸作品は、家庭内の需要に合った作品形式が多く、伝統的図案と華やかな作風が特徴であった。また千代田の大妻技芸学校創立期の手芸科目と技法が、昭和時代においても函館大妻で継承されていることが分かった。

現存する外山ハツの刺繍作品は、明治時代の美術刺繍の流れを汲む作品であることが確認できた。このことによって、函館大妻所蔵の刺繍作品は、千代田の大妻技芸学校創立期の刺繍課程を知る、重要な資料であると位置付けた。また、函館大妻所蔵の若手教員、学生の卒業制作作品の刺繍技法の比較を行い、時代的変遷を明らかにした。

1. はじめに

函館大妻技芸学校（現函館大妻高等学校。以下、函館大妻と呼ぶ）は、大妻技芸学校の卒業生である外山ハツによって、大正 13（1924）年に函館市蓬萊町に創立された。昭和 36（1961）年に函館大妻高等学校と改称、平成 15（2013）年には創立 90 周年を迎えた女子教育学校である。同校には、教員および学生による手芸作品が所蔵されている。

東京都千代田区の大妻女子大学博物館も手芸作品を多数所蔵しており、現在、調査が進められているが、関東大震災と戦災によって、大妻技芸学校創立期の現存作品は少ないと見られている。特に、現存する刺繍作品は乏しく、書籍の記述および画像資料

に頼らざるを得ない状況である。

これに対し、函館大妻には、大妻技芸学校創立期の卒業生である外山ハツの刺繍作品（図 1）を中心に、大正時代末期から昭和時代前期の手芸作品が所蔵されている。これらの資料は、函館大妻の手芸教育の全容を明らかにするのみならず、千代田の大妻技芸学校の創立期の手芸教育課程を知る重要な手掛かりとなる。

これまで函館大妻の手芸作品の存在は知られてきたが、詳しく調査されたことはなかった。本論では、函館大妻の手芸作品の調査から、その特徴を報告し、大正時代末期から昭和時代前期にかけての函館大妻における手芸教育の様子を捉えるとともに、大妻コタカによる初期大妻手芸教育の一端を明らかにすることを目的としている（注 1）。



図 1 櫻下の孔雀刺繍額

2. 函館大妻技芸学校の創立

函館大妻の創設者である外山ハツは、明治 26 (1893) 年に函館市で生まれた。大正 2 (1913) 年に函館裁縫女学校本科を卒業後、海産業の男性と結婚するが大正 6 (1917) 年に離婚した。ハツは自活の必要に迫られ、二人の子供を抱えながら和裁と手芸を教える私塾を開いた。私塾は評判となり盛況であったが、より高度な技術を身につけることを決意し、大正 7 (1918) 年に単身上京、大正 8 (1919) 年に東京の大妻技芸学校手芸部刺繍科の高等科に入学した。

すでにハツは 26 歳であり、他の女学生に比べると年長であった。函館で私塾を開くほどだった技能を活かし、学業の傍ら裁縫の内職をして函館に預けた子供の生活費と自分の学費をまかなっていた。その腕前は、大妻コタカが感心するほどのものであったという (注 2)。卒業後は専科に上がり、大正 11 (1922) 年には大妻技芸学校第二部刺繍科講習部の助教諭として勤務した。学校では確かな技術と知識から頼りにされ、学生からは年の近い「お姉様先生」として慕われたという。翌年の関東大震災をきっかけに函館に帰郷すると、大妻コタカの助言もあり、ハツは故郷函館に学校を開くことを決める。大正 12 (1923) 年に函館大妻技芸学校の創立が承認され、大正 13 (1924) 年に函館大妻技芸学校は各種学校として開校した (注 3)。

函館大妻創立に際して、ハツは大妻イズムの継承を掲げ、大妻コタカから関連校として全国で初めて「大妻函館」の校名を使用する許しを得た。当時の卒業生向け同窓会誌『白ゆ里』(大妻同窓会校友部発行) には、以下のように紹介されている (注 4)。

「消息

女史は本校に於て六年間各種の手藝を修得せられ特に大正九年春より刺繍即科同高等科、同研究科を了へて蘊奥を極められたのであります (中略) 校主校長両先生もその堅固な志に感ぜられたので女史の切なる希望を容れて大妻技芸学校と称することを御了諾になったのであります。茲に函館大妻技芸学校を御紹介申し上げますと共に外山女史の御事業のいやまし盛大ならんことを祈って居ります。」

『白ゆ里』第 4 号、大正 14 年

大妻技芸学校は、大妻コタカによって明治 41

(1908) 年に裁縫・手芸の私塾として開設されたのち、大正 5 (1916) 年に私立大妻技芸伝習所、翌年の大正 6 (1917) 年に私立大妻技芸学校と改称された。ハツが入学したのは、大妻技芸学校設立まもない時期であり、また助教諭として働いた時期は、大妻実科高等女学校設立、裁縫部夜間部増設、実科高等女学校が高等女学校に組織変更される等、大妻技芸学校が急激に拡大していた時期にあたる。このため、ハツは大妻コタカによる初期大妻手芸教育の強い影響を受けたといえる。また、函館大妻設立時の教員であった、外山ハツ、神田マスコ、内海千代子の 3 名は、いずれも千代田の大妻技芸学校出身であった。このことから、函館大妻における学科目、制作作品、指導内容等は、千代田の大妻技芸学校に倣って行われていたと考えられる。

昭和 6 年の函館大妻の学科目について、当時の新聞が以下のように伝えている (注 5)。

「本科、研究科、刺繍科、洋服科に分かれているが本科の学科目は修身 (国民道德の容要旨、作法)、家事 (衣食住)、裁縫 (運針、裁方、縫方)、手芸 (編物、袋物、刺繍、造花、摘細工) 体操 (普通体操) で高等科、研究科はこれに準ずるものであるが、希望者には特に手芸を教養するほか科外には将来主婦として一家を修むる上において必要な茶と生花それに作法を教えている。」

『北海タイムス新聞』北海タイムス新聞社、

昭和 6 年

昭和時代初期の記述であるが、千代田の大妻技芸学校と同様に、函館大妻においても裁縫と手芸教育に重点を置いていたといえる。また、手芸の「編物、袋物、刺繍、造花、摘細工」のうち、造花と摘細工は、昭和 6 年当時の大妻技芸学校ではすでに独立科目ではなくなっていた。これに対し、函館大妻では摘細工が主要科目に置かれていたことから、函館大妻では、千代田での初期大妻手芸教育の伝統が引き継がれていたと考えられる。

3. 現存作品調査

筆者は平成 27 年 8 月に函館大妻に赴き、30 点の手芸作品について現物確認と調査、計測・撮影を行った。観察した作品は大正時代末期から昭和時代前期のものと見られ、外山ハツ、学校教員、学生に

表 1 函館大妻所蔵手芸作品 (平成 27 年 8 月調査分)

番号	作品名	技法	作品形式	制作者
1	櫻下の孔雀刺繍額	刺繍	額	外山ハツ
2	白鷺と松刺繍額	刺繍	額	外山ハツ
3	老猿刺繍額	刺繍	額	外山ハツ
4	雌雄鶏図案刺繍額	刺繍	額	外山ハツ
5	連獅子図案刺繍	刺繍	額	外山ハツ
6	白牡丹図案刺繍額	刺繍	額	外山ハツ
7	金閣寺刺繍額	刺繍	額	外山ハツと学校教員 (大きい先生)
8	銀閣寺刺繍額	刺繍	額	外山ハツと学校教員 (大きい先生)
9	大沼公園風景図案刺繍額	刺繍	額	学校教員 (大きい先生と小さい先生)
10	北斎五十三次図案刺繍屏風	刺繍	六曲一隻屏風	卒業生と外山ハツ
11	百人一首図案刺繍屏風	刺繍	六曲一双屏風	卒業生と外山ハツ
12	紫地あざみ図案刺繍札入	刺繍、袋物	袋物	不明
13	青地王朝絵巻図案刺繍箱せこ	刺繍、袋物	袋物	不明
14	雛人形と山桜刺繍掛軸	刺繍	掛軸	不明
15	刺繍見本	刺繍	台紙	学生
16	基礎縫 (欧風刺繍)	刺繍	台紙	学生
17	スモッキング刺繍見本	刺繍	布本	学生
18	薄紫地花葉玉摘細工飾羽子板	摘細工	羽子板	不明
19	鳳凰と松摘細工飾羽子板	摘細工	羽子板	不明
20	松竹梅摘細工飾羽子板	摘細工	羽子板	不明
21	紫白絞染地鳳凰摘細工飾羽子板	摘細工	羽子板	不明
22	女被姿押絵飾羽子板	押絵	羽子板	不明
23	若衆大首絵押絵飾羽子板	押絵	羽子板	不明
24	鶴と松押絵飾羽子板	押絵	羽子板	不明
25	天女鳳凰吉祥図押絵熨斗	押絵、摘細工	熨斗	不明
26	木目込鞠人形紅白連獅子	木目込	人形	不明
27	木目込雛だるま人形	木目込	人形	不明
28	紅金魚型水引細工人形	水引	人形	不明
29	絹地に薔薇モール細工丸壁掛	モール細工	壁掛	不明
30	紫黄マクラメ編手提げ	マクラメ	手提げバッグ	不明

よって制作されたものである。

30 点の作品の技法別内訳は、刺繍 15 点、袋物 2 点、摘細工 4 点、押絵 3 点、摘細工と押絵 1 点、水引細工 1 点、マクラメ 1 点、木目込人形 2 点、モール細工 1 点であった (表 1)。以下、技法別に紹介する。なお、刺繍については作品数が多く、また大妻手芸教育に重要な項目のため、第 4 章で別途説明する。

(1) 袋物 (ふくろもの)

袋物とは、小物を入れて運ぶための袋物、箱の総称である。作品そのものを指す場合と、これを作る手芸技法を指す場合がある。明治時代から昭和時代にかけて人気の手芸であり、大妻コタカの著作にもしばしば取り上げられている (注 6)。

函館大妻では刺繍の袋物 2 点を確認した。1 つはあざみの花を刺繍した札入れである。細い絹糸と金糸を用いた日本刺繍がされており、色合いが美しく、伝統的ではありながら大柄でモダンな作風である (図 2)。もう一つは青地にこぎん刺しのような技法によって、王朝絵巻風の図案を刺した箱せこである。両作品とも若い女性が持つ服飾小物として仕

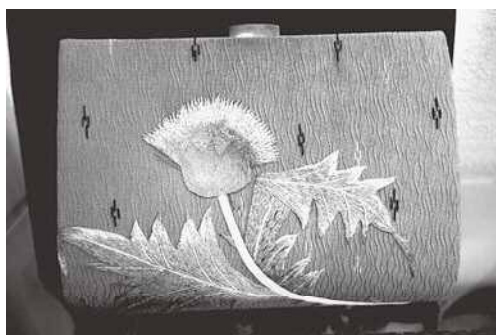


図 2 紫地あざみ図案刺繍札入



図 3 天女鳳凰吉祥図押絵熨斗

立てられていた。

(2) 押絵 (おしえ)

押絵は江戸時代から続く伝統的手芸であり、明治時代初期の女子教育に熱心に取り入れられた技法である。薄手の綿を縮緬地で包んで作った部品を組み合わせ、台紙に貼り合わせ絵柄をつくる。飾り羽子板や色紙などに仕立てることが多い。

函館大妻所蔵の「天女鳳凰吉祥図押絵熨斗」は、20 cm 角の方形の台紙に、天女像と鳳凰を表現した華麗な作品である (図 3)。押絵と摘細工の技法による細かな部品をいくつも重ねた、凝った作りとなっている (図 4)。裏に畳まれた箇所を開くと、火焰太鼓の図案が押絵で表現されている。この箇所は日光による影響を受けておらず、制作当時の鮮やかな色彩を伝えている (図 5)。おそらく、慶祝の際の儀式や贈答品として制作されたものであろう。



図 4 天女鳳凰吉祥図押絵熨斗 (部分)



図 5 天女鳳凰吉祥図押絵熨斗 (背面)

(3) 摘細工 (つまみざいく)

摘細工は、摘むように畳んだ小さな絹布を用いて簪、櫛、小間物等を飾る装飾技法である。明治時代の手芸女子教育に盛んに取り入れられ、千代田の大妻技芸学校でも創立から大正 15 年まで「手芸部摘細工科」が置かれていた。大妻コタカの著作にも摘細工の技法が詳細に紹介されている。しかし、千代田の大妻女子大学博物館には該当する作品が少なく、これまで詳細は不明であった。

函館大妻には摘細工の飾り羽子板 4 点が所蔵されていた。いずれも薄手の絹布で薄手の綿を包み、羽子板に貼り付けた上から摘細工で装飾したものである。図 6 の羽子板は、紫と白の絞り染の絹地に、摘細工で鳳凰の羽を表現している。羽の一つ一つが正確に折畳まれた美しい羽子板である (図 7)。明治時代の雰囲気強く感じられることから、遅くとも昭和時代初期の作品と考えられる。また、この他には、摘細工の葉玉を羽子板に飾り付けた作品などがあつた。いずれも経年による退色が見られるが、各所に残された当時の色から、制作当初はより色鮮やかで艶やかな作品であつたと推察される。



図 6 紫白絞地鳳凰摘細工飾羽子板



図 7 紫白絞地鳳凰摘細工飾羽子板 (部分)

(4) 水引 (みずひき)

水引は、紙製の水引を用いて鬘斗や飾りを作る、日本の代表的な伝統手芸であり歴史は長い。明治時代以降も、家庭内での需要もあつて広く愛好された。

大妻技芸学校では設立時に「水引結び方」科が置かれたが、大正 11 年ごろに廃止になった。しかし、昭和時代初期の大妻コタカの書籍には、水引の実例が数多く紹介されており、一般では需要のある手芸技法であつたようである。

函館大妻所蔵の「紅鯛型水引細工人形」は、赤い水引を用いて立体的な鯛を模った人形である (図 8)。退色と破損が見られるが、水引の結び目がしっかりと整っており、ふっくらとした鯛の姿を上手に表現した愛らしい作品である。こうした立体的な作品を「水引細工」と呼び、結納や婚礼などの慶祝の儀式の際に、贈答品や飾り付けとして使用された。本作品も、形状と結び目の形から、婚礼などの慶祝の小道具と考えられる。

千代田の大妻女子大学博物館では、現在のところ水引作品の実物が見つからない。また大妻コタカ著の書籍には、鬘斗につける一般的な水引結びの実例しか紹介されていない。しかし、この函館大妻所蔵の作品によって、初期大妻手芸教育において立体的な水引細工が制作されていた可能性が出てきた。

(5) マクラメ編 (まくらめあみ)

マクラメ編は、日本では大正時代に流行し、各地で講習会が開かれるほど人気の手芸であつた (注 7)。千代田の大妻女子大学博物館には、マクラメ編の現存作品が多数所蔵されており、学科内で熱心に行われていたと見られている。

函館大妻所蔵のマクラメ編は、紫色と黄色のリリヤン糸でかぎ針編をした丸型の手提げである。小ぶりの手提げのため、財布や小物入れといった用途で制作されたものと考えられる。

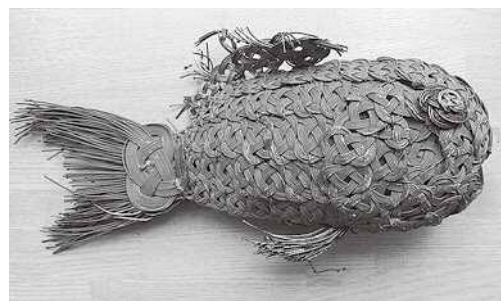


図 8 紅金魚型水引細工人形

(6) 木目込人形 (きめこみにんぎょう)

木目込とは、木で作られた人形に布地を貼り、折り目や襷をつけて衣服を表現する技法で、現在でも雛人形や節句人形に用いられている。明治時代以降、女性の家庭内手芸として人気であり、一般向け手芸本にも紹介された。

函館大妻には、ダルマ型と鞠型の紅白木目込人形 2 組が保存されていた。保存状態、人形の表情、使用されている布地から比較的近年の作風と感じられ、昭和時代前期以降のものと考えられる。千代田の大妻技芸学校、函館大妻ともに、木目込人形に関する学科は確認できていないが、当時人気の手芸であったため、教科に取り入れられていたと考えられる。

(7) モール細工

モール細工については、千代田の大妻技芸学校と大妻コタカの著作でも記述が見当たらず、詳細は不明である。リボン細工の一種であり、一般的には昭和時代後期まで人気のあった手芸である。

本作品は、丸型の壁掛に赤と灰色のモールでバラの花を象り、リリヤン糸で葉と茎を表現している。また中央には写真を入れることができる。こうした壁掛は昭和時代前期ごろまで、少女向け雑誌でよく取り上げられていた。

函館大妻所蔵の手芸作品は保存状態が良いものが多い。高度かつ繊細な技法と、華やかな意匠の作品が多いのが特徴である。中でも、押絵と摘細工は、伝統的な意匠を鮮やかな色彩と凝った装飾で表現した、豪奢な雰囲気作品が多い。千代田の大妻技芸学校の手芸作品とは異なる、函館大妻独自の作風であると言える。これは大正時代末期の東京で過ごした講師陣の美的感覚と、港町函館の持つ異国情緒が相まって反映されたものと考えられる。またその一方で、実用的かつ家庭内や身近な暮らしの中で活用できる品が多いのは、千代田の大妻技芸学校の作品にとっても似ている。これは大正 5 年に大妻技芸学校が掲げた「女子に必須の学芸を授けると同時に淑徳を涵養して其の天性を助長せしめ以って着實なる賢母の養成を目的とす」という教育方針が、函館大妻にも継承されたことを示すものである。

4. 外山ハツによる刺繍作品と美術刺繍

今回調査した作品中、刺繍作品が最も数が多かった。函館大妻所蔵の作品は、外山ハツ作品、教員作

品、学生作品分けられるが、今回は特にハツの作品を多く見る事ができた。

ハツによる作品は、後述する大妻技芸学校卒業作品と、函館時代で制作された 5 点の刺繍額である。牡丹の花、白鷺、雌雄の鶏、猿を主題とした日本画風の図案を、精緻な日本刺繍の縫 (ぬい) で表現したものである。特と白鷺と鶏の白い羽は、様々な糸とステッチを組み合わせて丹念に刺すことで、単調に見えないように工夫してある。絹糸による艶や立体感の表現は秀逸であり、一見すると絵画に見える高度な刺繍作品である。

こうした絵画的図案を高い刺繍技術で表現した作品は「美術刺繍」と呼ばれ、明治時代から大正時代にかけて京都を中心に制作されていた。当時は日本を代表する美術工芸作品として国内外の博覧会に出品され、高く評価されていた。この流れを受け、刺繍は女性自立を助ける新職業と期待され、黎明期の女子教育の重要な位置におかれた。明治時代に設立された和洋裁縫伝習所 (明治 14 年、現東京家政大学)、共立女子職業学校 (明治 19 年、現共立女子大学)、女子美術学校 (現女子美術大学、明治 33 年) でも、非常に高度な刺繍教育が行われ、美術刺繍作品が数多く制作された (注 8)。

千代田の大妻技芸学校でも刺繍は手芸分野の主要な科目として重視され、創立期から昭和 24 年まで、独立学科が設けられていた。しかし、現存する創立期の刺繍作品は少なく、画像資料でも小型～中型の刺繍額しか確認できていなかった。大妻技芸学校創立期の大正時代末期は、美術刺繍産業の衰退期にあたることもあり、これまで大妻技芸学校では、美術刺繍作品ではなく、実用的刺繍が中心に教授されていたと考えられてきた。しかし、函館大妻所蔵の外山ハツの作品は、いずれも絵画を図案とした高度な刺繍作品であり、まさに明治時代から行われてきた美術刺繍の流れを組むものである。ハツの刺繍によって、初期大妻手芸教育においても、美術刺繍が行われていたことが明らかとなった。

美術刺繍の流れを汲む大妻の刺繍教育は、函館大妻においてどのように発展したのだろうか。本章では、函館大妻所蔵の ① 外山ハツの卒業作品、② ハツと教員による作品、③ ハツと学生による卒業作品、④ 教員の作品の 4 種類の刺繍作品を取り上げ、函館大妻の刺繍教育と技法の変遷に焦点をあてる。

① 「櫻下の孔雀刺繍額縁」

本作品は、函館大妻所蔵の中で最も初期の作品で

あり、加えて技術、図案、構図においても最も優れた作品といえる（図 1 参照）。外山ハツが大妻技芸学校の卒業制作作品として 630 時間かけて完成させたものである。また、図案はハツが自ら動物園に出向きスケッチしたという。

満開の桜の枝に悠然と止まる孔雀が刺繍されている。図案右下には「はつ子」の文字と、落款風に図案化された「外山」の文字が刺繍されている。全体に経年による退色が見られるものの、糸のヨレ、崩れも殆どなく、絹糸の艶も保たれており、ハツがいかに丹念に釜糸を扱い、精密に刺したか、またその技術の高さを表している。桜の花は釜糸をやや甘よりにして、絹糸の艶を生かすようにふっくらと綿密に刺されている。これに対して孔雀の羽は、太めの

絹糸に強いよりをかけて、絢爛豪華に表現している（図 9）。図案は華やかながら叙情的であり、大正時代末期の雰囲気を伝える。

孔雀は、明治時代後期の美術刺繍分野で好まれた刺繍図案である。このことから、本作品は明治時代から続く美術刺繍の流れを汲む作品だと言える。

制作当初は軸装されていた（図 10）。本作品はハツが帰郷する際に持参し、その後、衝立に表装され、開校まもない函館大妻の学内に飾られた（注 9）。

「玄関には極めて精巧な孔雀と桜の刺繍の衝立が目につきます。申すまでもなく校長外山ハツ女史の作です。」

『主婦之友東北付録』主婦之友社、大正 14 年

昭和 9 年の函館大火の際には衝立から引き剥がして避難し、その後、額装された。現在は函館大妻のホールに展示されている。

② 「金閣寺刺繍額」と「銀閣寺刺繍額」

金閣寺と銀閣寺を刺した一対の刺繍額である（図 11、12）。本作品はハツと「大きい先生」（在学中にハツから直接指導を受け、卒業後に指導者となった教員）らによって制作された作品である。

「金閣寺刺繍額」の左下には「大妻学園」の文字が赤い糸で、「銀閣寺刺繍額」は右下に黒糸で刺繍されている。「金閣寺刺繍額」は、手前に置かれた松の生き生きとした表現と、中心に据えられた鹿苑寺が荘厳な佇まいが対照的で、力強さを感じさせる。一方、「銀閣寺刺繍額」は、全体に淡く抑えた色調でありながら、巧みに糸の太さを変えることで、静的で凛とした風情を感じさせる秀作である。



図 9 桜下の孔雀刺繍額（部分）



図 10 外山ハツと《桜下の孔雀刺繍額》



図 11 金閣寺刺繍額



図12 銀閣寺刺繍額

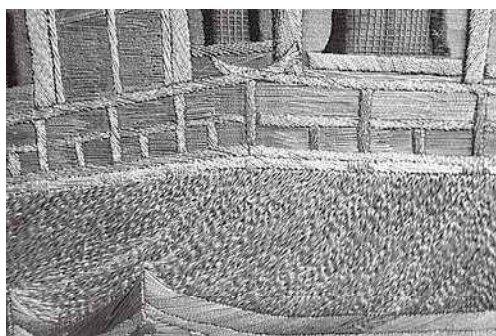


図13 銀閣寺刺繍額(部分)

両作品とも寺部分に使用している糸は非常に細く、縫も緻密である。特に側面の壁と屋根は、多種類のステッチを用いて立体的に表現しており、絹糸の艶が美しい(図13)。これに対して、松の木はやや太めの絹糸を用いることで生命力を表現するなど、多彩なステッチと糸の使い分けが画面に奥行きを感じさせる。また、空や水面は、下地に顔料とみられる絵具で着色されており、その上に刺繍することで、透明感を生み出している。

③ 「北斎五十三次図案刺繍屏風」と「百人一首図案刺繍屏風」

2つの刺繍屏風作品は、学生による卒業制作に、ハツが一部加わって制作された作品である。

「北斎五十三次図案刺繍屏風」は、北斎による原画を正確に日本刺繍で刺している(図14)。ハガキサイズの小さな絹布に、北斎の図案を見事に表現する技術の高さは、当時の函館大妻生がいかに厳しい刺繍の修練に取り組んでいたかを示している(図15)。



図14 北斎五十三次図案刺繍屏風

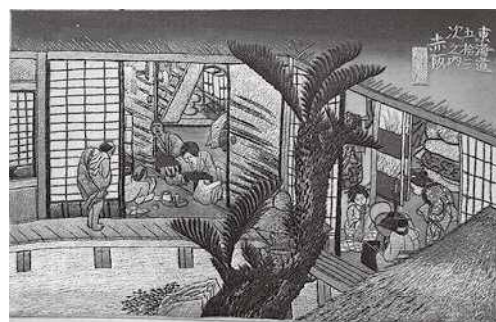


図15 北斎五十三次図案刺繍屏風のうち「赤坂」



図16 百人一首図案刺繍屏風

「百人一首図案刺繍屏風」は六曲一双の大型作品である(図16)。「北斎五十三次」と同様に、1人が1枚の短冊型の絹布を担当し、和歌と人物を刺繍している(図17)。筆文字の和歌を、丁寧に日本刺繍で表現した力作である。

この2つの作品は、小さな面積に綿密に刺繍させることで、学生に高度な刺繍技術を体得させるよう工夫されている。時間的制約がある中で、作品の質を落とさない教育的配慮といえよう。これら一つ一つは小さな刺繍作品であるが、大型屏風に仕立てることで、卒業作品としての一体感と格を生み出している。

④ 大沼公園図案刺繍額(大先生と小さい先生)

「大きい先生」と「小さい先生」(「大きい先生」



図 17 百人一首図案刺繍屏風（部分）

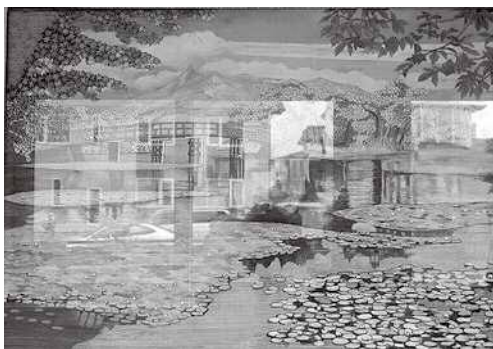


図 18 大沼公園風景図刺繍額

の教え子で、後に教員になった若手教員）による作品である。外山ハツから続く刺繍技法を伝承するために制作された。

函館市の大沼国定公園の風景画を油絵風に仕立てた刺繍額である（図 18）。布地に薄色の顔料で描かれた下地に、大きめのステッチで刺繍している（図 19）。前述のハツの卒業制作、「金閣寺刺繍額」、「銀閣寺刺繍額」に比べると、ステッチは大きめでやや粗い印象が否めない。しかし、忙しい教務の合間に、外山ハツの刺繍技法を次世代に受け継ぐために編み出された合理的な方法であったと考えられる。縫目こそ大きい、大胆な図案と色合い、見栄える華やかな雰囲気は、函館大妻の手芸作品に共通する刺繍の特徴が表れている。

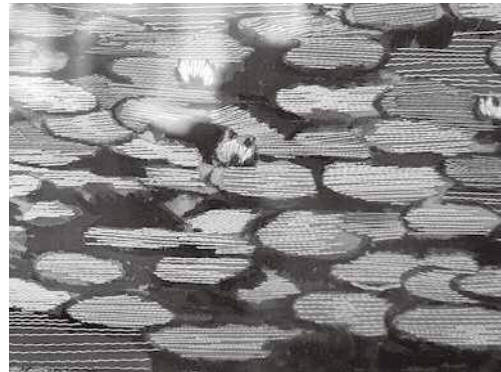


図 19 大沼公園風景図刺繍額（部分）

函館大妻の刺繍は、ハツによる美術刺繍を基礎として、学生と次世代の教師陣へと確実に受け継がれていった。時代と共に、徐々に刺繍技法の簡略化が見られるが、作品を小さくして質を保つ、また絵具による描画と組み合わせるなどの、様々な工夫によって、伝統的な刺繍技術を継承していったといえる。

5. おわりに

外山ハツの刺繍作品を中心に、函館大妻所蔵の手芸作品を見てきた。

函館大妻所蔵の手芸作品は、高度な技術を用いて伝統的な図案を表現した、華やかな雰囲気が特徴である。また袋物、押絵、水引などの家庭内での需要に合った作品形式が多い。また、作品から、千代田の大妻技芸学校創立期の手芸科目と技法が、函館大妻において昭和時代前期ごろまで継承されていた可能性があることがわかった。

現存する刺繍作品は、絵画的図案の大型作品が多い。特に創立者の外山ハツの作品は、いずれも明治時代の美術刺繍の流れを汲む絵画的要素の強い刺繍作品であることも明らかとなった。また、ハツによる高度な刺繍技法は、時代による変化をうけながらも、卒業制作や教員作品制作を通じて受け継がれていった。

函館大妻所蔵の手芸作品は、千代田の大妻女子大学博物館には所蔵されていない技法作品も多い。これまで不明であった創立期の手芸課程について、函館大妻所蔵作品によって補完できる可能性が出てきた。特に外山ハツによる刺繍作品は、初期大妻手芸教育において美術刺繍が行われていたことを示す貴重な資料である。

今後は、さらに函館大妻所蔵の手芸作品の調査を進めるのと同時に、千代田の大妻女子大学博物館所蔵作品および大妻の手芸カリキュラムとの比較を行っていく。

謝辞

本調査にあたり、学校法人函館大妻学園函館大妻高等学校の西野鷹志理事長、池田延己先生のご協力と貴重なご助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

本研究は、平成 27 年度大妻女子大学戦略的個人研究費の助成を受けて行いました。

注

注 1 本論では、大妻コタカによる手芸教育を「大妻手芸教育」、大妻技芸学校が創立された大正 6 年から昭和 10 年頃までに行われた裁縫手芸教育について、大妻独自のカリキュラムと当時の社会的影響の大きさ、現大妻女子大学の家政学部被服学科につながる裁縫手芸教育の基礎となった重要な教育内容として、「初期大妻手芸教育」と呼ぶ。なお、本論のうち大妻技芸学校

のカリキュラムについては、学校法人大妻学院『大妻学院八十年史』（平成元年）を参照した。

注 2 大妻コタカが函館大妻高等学校創立 35 年記念祝辞として述べたもの。『創立 90 周年記念誌 思いをつなぐ十年』学校法人函館大妻学園、平成 26 年、p. 26。

注 3 同上、pp. 22-29 参照。

注 4 『白ゆ里』第 4 号、大妻同窓会交友部、大正 14 年、p. 86。

注 5 『創立 70 周年記念一針一心道を拓く』、学校法人函館大妻学園函館大妻高等学校、平成 5 年、p. 16

注 6 袋物については、大妻コタカの著作である『袋物講義』（出版年不明）や『おさいくもの新書』金星堂、昭和 6 年などに紹介されている。

注 7 大正時代末期から昭和時代初期まで、マクラメ手芸の講習会が開催され、関連図書も出版された。作例には、栞、袋物、ランプシェードなどの実用的な家庭小物が多い。小出春江著『マクラメ手藝と其の應用』盛林堂、昭和 2 年

注 8 中川麻子「美術染織：成立と構造」共立女子大学博士論文、2012 年。中川麻子「明治時代の女子教育における刺繍について」筑波学院大学紀要 8、pp. 51-57、2013 年

注 9 記事名「函館大妻技芸学校」学校法人函館大妻学園函館大妻高等学校前掲書、p. 15 より引用。